

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

編集発行 公益財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内
TEL・FAX 083-922-1218

松陰研修塾基礎コース

東京・鎌倉特別研修を終えて―松陰先生の足跡をたどる―

公益財団法人松風会 理事 (特別研修担当) 新江田 智司

令和五年十月二十八日から二泊三日、二十一名の参加者とともに県外特別研修が実施された。大阪・奈良研修以後、コロナ禍で中断を止むなくされたが、六年ぶりの再開である。

今回の研修地は、江戸・鎌倉に残る松陰先生ゆかりの史跡・旧跡とし、その折々の場での松陰先生の思いや志を振り返ることとした。

旅の目的について、二十一歳の松陰先生は、藩外へ初めての旅となる九州遊歴を記した『西遊日記』の序文に、次のように述べておられる。

道を学び己れを成すには、古今の跡、天下の事、陋室^{ろうしつ}黄卷^{わうかん}にて固より足れり。豈に他に求むることあらんや。顧ふに、人の病は思わざるのみ。則ち四方に周遊すとも何の取る所ぞと。曰く、「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く。発動の機は周遊の益なり。」

この「心はもと活きたり…発動の機は周遊の益なり。」は私の好きな一文である。現代語訳をしてみると、次のようになる。

(ある人は言う) 人の行すべき正しい道を学び、自己を形成するには、狭い部屋に閉じこもり古今の歴史や国の政治を書物を通して学べば

済むことだ。どうして他に求めることがあろうか。私が思うに世間一般の人の欠点は、ただ書物を読むだけで、その知識に基づいて思考を広げようとしないうところにある。世間では言っている、「たとえ四方に旅して見聞を広めたとしても何の意味があるだろうか」と。しかし、私(松陰)は次のように答える。「心はもともと活きていけるものであり、活きているものには、必ず動き始めきつかけがある。そのきつかけは何かに触れることによって生じ、感動する場面に遭遇して動き始めるものである。心の動くきつかけをつかむことこそ、広く旅することによって得られる長所であり素晴らしきである。」と。

松陰先生は、九州から、江戸、東北の青森までの旅をし、書物から学んだ知識を実際に見聞きし、道々の地理を極め、多くの人と出逢い、語らう中で、自ら体得し、実践家、行動家としての神髄を高められたのである。その究極の行動が、黒船来航後の下田踏海ではなかったか。その後、野山獄、松下村塾での教育者としての実践を経て、安政の大獄により、志半ばの一八五九年十月二十七日『留魂録』に後世の者へ憂国の志を託し、享年三十歳でその生涯を武蔵野の地で終えられたのである。

初日は、高輪泉岳寺から始まり、上野公園彰義隊墓地。そして宿泊地の浅草へ。

二日目は、涙雨の降る中の回向院参拝、終焉の地である小伝馬町処刑場跡、靖国神社練兵館跡。荒川区ふるさと文化館の亀川泰照様には、伝馬町牢屋敷の様子や処刑後の遺骸の埋葬までの経緯など大変貴重なご説明をいただいた。松陰神社では五名の地元ボランティアガイドの皆様に、世田谷へ改葬された様子や神社内の史跡、門人・知人の墓所などについて、詳細なご説明をいただいた。その後、欧米列国の外圧に備えたお台場砲台跡の見学。

最終日の鎌倉では、瑞泉寺副住職木下周道様から、古刹瑞泉寺開山の歴史や、竹院和尚と松陰先生の交流、四通の直筆の手紙の解説など、貴重なご説明を賜った。その後、法華堂では毛利家先祖の墓所へ。隣に薩摩藩祖の墓が並置されており、幕末の薩長連合との不思議な縁を感じるなど、歴史の新たな面白さに気づかされる発見の連続でもあった。

今回、大変お世話になった、荒川ふるさと文化館の亀川泰照様、松陰神社の五名の観光ボランティアの皆様、鎌倉瑞泉寺副住職木下周道様には重ねて心から厚くお礼を申し上げます。

また、松陰先生という人物の縁により繋がることの



鎌倉市 瑞泉寺山門前

できた、ご参加の方々に感謝するとともに、研修旅行を準備された事務局をはじめ、旅程相談や案内役を務めてくださった大学時代の友人宮田孝志様にも心よりお礼申し上げます。

末筆、私事にて失礼する。東京・鎌倉研修から帰ってから三日後に、趣味のマラソン出場を兼ねて宮城・福島震災復興の足跡を探る東北に旅行に出かけた。その途中、松陰先生が東北遊歴の際に立ち寄られた地にも足を運び、そこで改めて多くの犠牲者が出た震災遺構を目の当たりにして、その悲惨さを再認識することができた。

地を離れて人なく、人を離れて事なし、故に人事を論ぜんと欲せば、まづ地理を見よ。

②

現代社会は、ネット社会、瞬時に様々な情報を手に入れることができる。しかし、画像や文字で見える情報と、自ら足を運び、自分の眼で直に情報を体感するのでは、雲泥の差がある事を痛感させられた。今改めて、松陰先生の「地を離れて人なく…」の言葉の大切さ重さを実感することのできた旅でもあった。

註
①「吉田松陰全集」(大和書房 以下「全集」と記す。第九巻頁二五)

②「全集」第二巻頁八八

松陰研修塾基礎コース

東京・鎌倉特別研修の報告

松陰先生は、三十歳という短い生涯の中で、広く全国を旅され、各地で多くの人との出会い、親交しておられる。県外特別研修においても、参加者の方々と親交を深めることができたことを嬉しく思っている。この三日間を紙面を借りて、簡潔に報告させていただく。

一日目 十月二十八日(土)

泉岳寺・上野公園・浅草

以下文責

松本芳之・新江田智司・川上修一

(一) 新山口駅出発

快晴の朝を迎える。前日の二十七日は、松陰先生が処刑された一八五九年から数えて一六四回目の命日となる。新幹線でわずか五時間足らず。江戸時代の約一ヶ月間の旅とは、天と地ほどの差を感じる。

(二) 高輪『泉岳寺』

元禄十四年十二月十四日、吉良邸討ち入り。後日、主君の仇打ちの罪で切腹を命じられた大石内蔵助ら、四十七士の赤穂浪士の墓が主君の浅野内匠頭夫妻と共に、並んでいる。この日も、墓前に線香

を供える参拝者が後を絶たない。この泉岳寺と松陰先生のかかわりは、東北遊歴の際の待ち合わせ場所ともなった。下田踏海の罪で、江戸へ護送される際に、泉岳寺で次のような和歌を詠んでおられる。

かくすれば、かくなるものと知りながら、已むに已まれぬ大和魂

③

松陰先生は、自らの国を憂う一途の思いと、忠義をなした赤穂義士の生き方に、山鹿流兵学者として共通性を感じて詠まれた歌ではなかったか。国難の中、忠義と尊皇を大切にされた松陰先生にとつて、泉岳寺は特別な場所として位置づけられていたと感じた。

(三) 上野公園『彰義隊墓所』

江戸城無血開城の後、將軍慶喜を護衛する彰義隊と新政府軍は上野寛永寺で戦うことになった。上野公園は戦死した彰義隊の兵士を荼毘に付した場所である。

新政府軍総指揮官は大村益次郎。江戸の町が火の海になることを危惧した大村は五月十五日の梅雨期を総攻撃日とした。追い詰められた敵兵が暴徒化し、町中に放火するのを避けるため、上野の北側に逃げ道を開けていたと言う。戦況は、午後、

加賀藩邸から発せられた新型アームストロング砲で一挙に決したと言われ、テレビ等でもドラマ化された。しかし、これには多少誇張された面があるようで、事実とはやや異なるとされる。いずれにせよ大村の新政府軍への大いなる功績に疑う余地はない。

(四) 『西郷隆盛』銅像の前に

彰義隊墓所の前には、皮肉にも新政府軍の現場指揮者であった西郷隆盛の銅像が建立されている。後の西南戦争で賊軍となった西郷の銅像が何故上野公園に建てられているのか。大赦によって復権された当初は、皇居前に建てられる予定だったが、西南戦争で明治新政府の朝敵となり反乱を起こした逆賊でもあることから、皇居前に建てるのは憚られたとも言われている。西郷が好んだ『敬天愛人』の石碑とともに建立されている。



上野公園 西郷隆盛銅像前

(五) 懇親会と松陰先生について語り合う

初日の夕食会は、浅草の遠州屋にて参加者方々と、顔合わせを兼ねての懇親会とした。

参加者から、松陰先生への熱き思いを語っていただいた。松陰先生の生き方に感銘を受けて参加された方、松陰教学を通して生涯学び続けることの大切さを語られた方、病気の克服を機に松陰先生ゆかりの地を訪問したいと夫婦で参加された方、松陰先生の教育力を仕事上の人づくりに活かしたいと述べられた方など、大変有意義な会となった。

改めて参加いただいた方々に感謝を申し上げたい。親交を深める中で、松陰先生の次の言葉を想起したので、ご紹介したい。

安政五年七月、江戸に出立する二十二歳の入江杉蔵に贈った名文である。

杉蔵往け。月白く風清し、飄然として馬に上りて、三百程、十数日、酒も飲むべし、詩も賦すべし。今日の事誠に急なり。然れども天下は万物なり、一朝奮激の能く動かす所に非ず、其れ唯だ積誠之れを動かし、然る後動くあるのみ。

④

天下は万物である。目下の情勢は急を要する。積誠(誠を積み努力)が必ずや人々の心を揺り動かすであろう。そのために江戸で、旅先で、時には酒を酌み交わし、

詩を吟じて多くの志士と親交し、絆を深め、自己を磨けよ。と奮起を促した内容のように思える。松陰先生は、広く全国を旅する中で、初対面の人と打ち解け合い、信頼関係を築き、多くの人と親交を深めておられる。この人間力は、江戸獄、野山獄、松下村塾でも如何なく発揮された。この人間力は松陰先生の魅力の一つでもある。

この前文には、「其の憂の切なる、策の要なる、吾れの及ぶ能はざるもの」と伝えていいる。松陰先生の憂国の至誠、大和魂は次代を担う若者らに託され引き継がれていったのである。

註

③「全集」第二巻頁八六

④「全集」第四巻頁三八八

二日目 十月二十九日(日)

小塚原回向院・十思公園・

靖国神社・練兵館跡・

松陰神社・台場砲台跡

二日目は、夜半からのあいにくの空模様であったが、予定どおり八時十分に二十七人乗りの貸切バスに乗り、浅草のホテルを後にした。一日目は新幹線やJR、地下鉄と電車による一般乗客と共に移動したが、二日目は貸切バスということもあり、松陰先生を共に慕うもの同士

の和んだ雰囲気と大きな期待感に満ちた車内であった。

(一) 小塚原回向院

まず、最初に訪れたのは小塚原回向院である。回向院は伝馬町牢内で刑死した人たちを埋葬するための寺院で、明治十四年に刑場が廃止されるまでの間に二十四万余名が葬られたといわれている。

もともと伝馬町牢では、刑死者の遺体が外部へ引き渡されることはなく、処刑後すぐに運ばれ、一カ所に埋められ、無縁仏扱いにされていた。松陰先生も例外ではなかったため、松下村塾の門下生には耐えがたいことであり、遺体を引き取り松陰先生を埋葬する必要があった。刑の執行後、牢役人に密かに手を回したが、交渉は難航し、二日後にやっと認められ、桂小五郎や伊藤利助たちによって松陰先生の墓が作られた。



松陰先生墓石(右手奥)

松陰先生の墓はブロック塀に囲まれた史跡墓の奥に置かれ、墓石には「松陰二十一回猛士墓」と刻まれている。この墓は久坂玄瑞が建てたものと言われている。

小塚原回向院では雨が降り続く中での

参拝であったためか、墓前では余計に松陰先生の無念さが強く感じられた。

回向院には松陰先生の墓以外にも頼三樹三郎や小林民部、橋本左内など安政の大獄によって伝馬町牢に繋がれ、刑死した人たちの墓や「桜田門外の変」で亡くなった方、後に刑死したりした水戸浪士たちの墓もあり、一つずつの墓を拝む参加者の皆さんの姿も多く見られた。

(二) 十思公園(伝馬町牢屋敷跡)

次に向かったのは、十思公園である。到着したところには、雨が上がり、さほど広くはないがビルが建ち並ぶ周辺とは違い、雨上がりでしっとりとした静かなたたずまいの中に公園はあった。十思公園は旧十思小学校跡地や大安楽寺、身延別院などと共に伝馬町牢屋敷があった場所に位置しており、松陰先生の終焉の地である。ここでは、松陰先生も聞かれたであろう「石町時の鐘」が架けられている鐘楼の下で、荒川ふるさと文化館学芸員の亀川泰照様から松陰先生の最期に至る様子や実際の現場での細かい位置関係、松陰先生の埋葬にかかわる小塚原回向院と伝馬町牢屋敷と



十思公園での研修

小塚原回向院と伝馬町牢屋敷と

の関係について丁寧な説明をいただいた。また、参加者の質問に対しては真摯にご回答いただいた。亀川泰照様には荒川区からわざわざ私たちのためにおいでいただき、深く感謝申し上げます。

十思公園の西側には新しく建てられた十思スクエア別館が建っており、公園との境には牢屋敷跡の石垣の一部が残されている。その石垣を目の当たりにすると実際にこの場所に牢屋敷があったことが容易に想像できた。また、東側には盛り土がなされ、萩から運ばれた石に刻まれた「吉田松陰先生略歴」や『身はたとい武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂 十月念五日 二十一回猛士』の辞世の句が刻まれた「松陰先生歌碑」、「松陰先生終焉之地」の三つの石碑が並んでいる。ちよ



松陰先生終焉之地石碑

うど雨上がりで、秋の木漏れ日が差し、幻想的な情景を醸し出していた。私

ちが石碑を見ていると他のグループが来られ、松陰先生を介した小さな交流の場ができ、松陰先生に関する研修の場もなった。実際に松陰先生が入牢していた場所は、旧十思小学校の建物が立っており、処刑された場所も大安楽寺の建物の

下に位置しているため、その場所を見ることはできなかったが、その想像力を働かせながら、できるだけ近くまで足を運び、手を合わせる参加者の姿が多数見受けられた。

(三) 靖国神社・練兵館跡

続いて向かったのは、靖国神社である。靖国神社には松陰先生を始め、坂本龍馬や高杉晋作、橋本左内などの他、明治維新前後で国のために命を落とした方々や国家防衛のために亡くなったいろいろな人たちが祀られている。

駐車場でバスを降りると先ず向かったのは、大村益次郎の銅像である。余りの大きさに驚かされたが、山口県民として誇らしい気持ちにもなった。天気も回復し、青空の下、大村益次郎の銅像をバックに写真を撮ろうと思うが、余りに大きいためカメラ画面に収めることが難しく、上手く撮影できなかったのが残念であった。



松陰先生が通われた練兵館跡

次に向かったのは、松陰先生がよく通われた練兵館跡である。練兵館は下野佐野藩の上屋敷の前にあり、江戸を代表する三大道場の一つとして知られる

道場で、齋藤弥九郎・新太郎親子が教える剣術塾であったが、明治維新後に取り壊され、跡地は後に靖国神社の一部となった。そこには白い五角形の「幕末志士ゆかりの練兵館跡」の立て看板と隣に「神道無念流練兵館跡」と刻まれた碑が建てられている。

松陰先生は萩藩に招かれ、二年間明倫館剣術道場で指導したことがある新太郎が、文事にも優れた有為の人物であることを知り、親しく交流を求めたようである。

(四) 松陰神社

次の研修場所は、松陰先生がねむる松陰神社である。靖国神社で積み込んだ昼食を頬張りながら、午前中の研修場所や次に訪問する松陰神社への期待などに話に花を咲かせながらの移動であった。

世田谷区役所前でバスを降り、松陰神社に向かう途中、国士館大学から松陰神社までの道沿いには、学生達による模擬店が建ち並び、調理する音や呼び込みの声で活気が溢れていた。世田谷産業振興公社から紹介されたボランティアガイドの皆さんとの待ち合わせ場所である大鳥居前には、すでにボランティアガイドの皆さんは到着されており、早速五つのグループに別れて自己紹介を行い、説明を受けることになった。

当日は「松陰神社参道商店街の秋まつり」ということもあって大変な混雑であつ

たが、経験豊富なガイドの皆さんだったため、懇切丁寧に元話を交えながらの説明を受けた。ときには参加者の皆さんから逆にガイドに対して松陰先生についての説明をするなど双方の研修場面もみられる内容豊かな研修となった。コースはそれぞれのグループによって多少の違いはあったが、御社殿での参拝や松陰先生像、模範された松下村塾、門下生の伊藤博文や山縣有朋達が奉納した多数の石灯籠等についての説明を受けた後、最後に松陰先生の墓所のお参りを行った。



松陰先生の墓前

松陰先生の墓所は、改葬される前の年、幕府の大赦令によって松陰先生達政治犯の罪が許されたため、それまで葬られていた小塚原回向院から高杉晋作や伊藤博文達によって一八六三年にこの地に改葬されたものである。同じ場所には松陰先生と特に親しく、安政の大獄で命を落とした頼三樹三郎や小林民部も改葬されている。

余談であるが、大鳥居のすぐ内側で「松陰読本」や「萩ものがたり」が販売されていたのには大変驚かされた。物価の高い東京での販売のためか、少し値段も高めであった。

名残惜しかったが、いよいよ二日目最後の研修目的地である台場公園の第三台場砲台跡に向けて松陰神社を後にした。

(五) お台場砲台跡

青空によく映えたレインボーブリッジを渡り、いよいよ台場公園駐車場に到着。第三台場までは駐車場から少し距離があったが、爽やかな風が吹き、足の疲れを癒やしてくれた。



台場 砲台跡

江戸幕府はペリーの来航によって江戸湾の防備強化のため、大砲を備えた十一基の砲台を海上に築くことを決断し、急ピッチで工事を進めた。しかし、日米和親条約が締結されたために完成したのは六基のみであり、その一つが砲台跡のある第三台場である。今は陸続きとなっているが当時は海の中にあった。かなりの高さで石垣が積み、その上に土が盛られた大がかりな構造物で、土手の上には砲台の跡のレプリカや大砲は結構な広さがあり、平らにならされていて陣屋やかまど跡が残されていた。この情景を見ると、松陰先生が萩や長門を始め、いろいろな海岸を視察し、山々

に登りながら西洋列強への備えとしての海防の重要性を強く訴えられてきたことが、現実のものとなった当時の慌ただしさ脳裏に浮かんできた。

いよいよ二日目も残り僅か、第三台場からの帰りは心地よい風に吹かれ、ほどよい疲れを感じながら駐車場に向かった。駐車場までバスに乗り、日が西に傾きつつある中を最後の宿泊地である横浜に向けて出発した。

三日月 十月三十日(月)

鎌倉

瑞泉寺・大塔宮・

荏柄天神社・法華堂

最終日、朝七時三十分、貸切バスで横浜のホテルを出発。車窓から冠雪した雄大な富士山にカメラを向けながら一路鎌倉へ。

松陰先生は、伯父竹院上人を訪ねて、幾度か瑞泉寺に上山された。嘉永六年五月の第二回目の滞在では、大塔宮の土牢、荏柄天神社、法華堂を訪問、頼朝公及び島津忠久・毛利祖の大江廣元公の墓を参拝し、さらに鎌倉大仏、袖ヶ浦、江ノ島まで足を伸ばされた。そこで、松陰先生が辿られた地を研修視察することとした。

(一) 瑞泉寺と伯父竹院上人との交流

まず、滞在された瑞泉寺を訪れた。鎌倉の山々の緑豊かな自然を感じながら石

段を登ると、瑞泉寺の山門が見えた。脇には、昭和四年建立の徳富蘇峰の筆による「吉田松陰留跡碑」がある。これは、遊歴日録の「上人方に出てて門を掃く、相見て喜ぶこと甚だし。」⑤に由来し、再会した折に門を掃いていた上人に出会った場所に建立されている。山門から木下周道副住職様の案内で、境内の梅林庭園、山水画を想起させる石庭やご本尊等を参拝見学するとともに、貴重な瑞泉寺所蔵の松陰先生の書三点、竹院上人書一点を拝見させていただいた。

その内の松陰先生筆の一点は、『東北遊日記「余連亡」の罪を以て、壬子十二月八日籍を削られ禄を奪はる。此れを賦して諸友に示す』である。東北亡命後の嘉永六年五月、瑞泉寺を訪れた際に、上人に贈られたのがこの書である。これには、次の言葉が記されている。

艱難崎嶇は問ふところに非ず、誓つ節義を蓄ひ國恩に報いん。…寧んぞ忍びんや百年報國の志、翻つて一身禄利の間に陥るに。

⑥

(亡命の罪で士籍を廃されたことで)これからの人生が艱難辛苦にみちたものであっても、節義をもつて国家百年のため尽くすとの強い志と覚悟を上人に示した書である。これに対し、竹院上人は甥松陰先生の覚悟を深く理解し、励まされたと言う。

竹院上人筆の一点は、漢詩「梵誌侍者に次韻す 端午」である。

端午山林露簷に満つ
蘿窓案に據り離騷を讀む
客來たり半日今古を論ず
激起す汨羅江上の濤

竹院上人が弟子の梵誌に与えたもので、この漢詩は、「端午の日に、蘿の絡んだ窓辺で、半日来客と今古を論じ、不遇の死を遂げた屈原を偲んだ」との内容である。楚の屈原は、国王の側近で正義感が強く、王や民衆から信頼されていたが、彼を憎む者の陰謀により失脚。屈原は失望のあまり川に身を投げ亡くなる、その日が五月五日であった。端午の節句は彼の供養としてはじまり、次第に人々が安泰を願う日となったという。詩は、この故事に由来

端午山林露簷に満つ
蘿窓案に據り離騷を讀む
客來半日論今古激
起汨羅江上濤
次韻
梵誌侍者端午
一笑 昌為撰

竹院上人の書

し、信念を貫く生き方を讃えたものと解することが出来る。上人のいかにも慷慨淋漓たる英雄感を思わせるものである。松陰先生は、下田踏海に向かう途中の安政元年三月十四日、四回目となる訪問を行っている。その時の心中を、詩に託して竹院上人への留別とした。

〔漢詩〕

名利無心世上求 一生不顧被人尤
獨悲驚駭報恩計 詭遇常爲君父憂
〔読み〕名利世上に求むるに心なく、一生人の尤を被るを顧みず。獨り悲しむ驚駭報恩の計、詭遇して常に君父の憂となるを。

〔意訳〕名声や私利を世情に求める心は無く、一生人からとがめを被ることも顧みない。獨り悲しむ鈍く劣った馬松陰自身を謙遜した言葉による国家報恩の計画、正理公道（あえて正しい道、公の道）を踏まない行動は常に君父の憂いとなるであろう。

甥松陰先生の決意を知った竹院上人は、これに答えて、次の漢詩を贈り、直往邁進を激励されたのである。

〔漢詩〕

勸君學業勿多求 志士臨時意欲尤
處々山林飄落後 青松閑却萬人憂
〔読み〕君に勸む學業に多く求むる勿れ、志士、時に臨んで意、尤ならんと欲す。處々の山林飄落の後。青松閑却す萬人の憂を。

〔意訳〕この年寄りが一言助言しよう。學業によって多くの成果を求めてはいけないと。志士は重大時に臨んで自分の思いが人よりも抜きん出ることを欲する。あちこちの山林はその終わりの

時が来ると葉を落とす。常緑樹の松だけはずべての人々の憂いをよそに青々とし、その生き生きとした緑の色を変えない。そのようにあなたには青年の志があり、すべての人の憂いを打ち捨てておいてしまふような気がする。

竹院上人は、甥を青松にたとえて自重と大成を期待し、激励したのである。これが上人との最後の面会となった。

下田踏海後の安政二年正月、野山獄から、二度と会うことのない竹院上人を、懐かしく偲びながら詠んだ詩がある。

〔漢詩〕

山光竹色入窓青
方丈幽深倚錦屏
今我爲因空憶昔
月中一夜叩雲扉

〔読み〕

山光竹色窓に入りて青く
方丈幽深、錦屏に倚る
今我れ囚となりて空しく昔を憶ふ
月中一夜雲扉を叩く

曾て私が訪ねたことのある寺は、青々とした山の光、竹の色が窓から射し込んでいた。竹院上人の居室はいかにも幽室であって錦屏山の麓に抱かれて物静かであった。私は今囚人となって空しく昔のことを憶い出したが、名月の一夜寺の扉

を叩いてねたことがあったなあ。嗚呼上人追慕の切なる情が偲ばれる。

私たちが今回訪れた瑞泉寺は、松陰先生が詠まれた漢詩の情景そのものであった。

〔瑞泉寺縁起〕

臨済宗円覚寺派の寺院で、鎌倉随一の花の寺、紅葉の名所としても知られている。鎌倉幕府の幕臣、二階堂道蘊が嘉暦二年（一一三二）夢窓国師を開山として創建したもので、当初は瑞泉院と号した。

夢窓国師は、円覚寺開山仏光国師の孫弟子で、鎌倉時代から南北朝時代に円覚寺、南禅寺、浄智寺など五山の住職に就くなどの名僧である。また、すぐれた作家という一面もあり、京の天龍寺、苔寺の名で知られる西芳寺の庭園や瑞泉寺庭園などが、国の特別名勝・名勝に指定され

ている。

瑞泉寺の庭園は鎌倉石の岩盤を穿って滝・池・中島をなし、岩庭とも呼ぶべき彫刻的手法からなっており、禅の故国中国の山水画を想起させる。下って江戸時代には水戸光圀公がこの地に滞在して「新編鎌倉誌」の編纂に当たられたという。光圀公にちなみ境内は早春には梅花に彩られる。

〔伯父竹院上人略歴〕

竹院は、寛政八年、萩に生まれ、父は毛利志摩の家臣村田右中、松陰の母滝の実兄である。幼にして僧となり、萩徳隣寺から、四方を行脚し、鎌倉円覚寺の首座、天保十四年（四八歳）鎌倉瑞泉寺第二十五世の住職となる。

この昇進に対して、吉田松陰全集編集者の広瀬豊氏は「この榮轉に当たり竹院は容易には受けず、ついに円覚・瑞泉全山の熱心なる懇願により漸く職を継いだ。余程の秀才であったと同時に徳望のあった人であった。」と述べている。極めて有能で且つ謙虚な人柄であったことがうかがえる。その後、安政二年に鎌倉円覚寺の第百九十七世住職、文久三年に京都南禅寺住職（臨済宗本山）となり、禪師で紫衣を賜う程の高僧であった。晩年は平常多病のため屢々熱海温泉に浴したが、慶応三年三月一日、同地にて入寂。享年七十二歳。門人ら遺骨を携えて帰山し、瑞泉寺歴世塔下に葬られる。



瑞泉寺庭園

鎌倉での母滝及び松陰先生の 人柄を垣間見る二つの余話

〔竹院和尚への土産の黍粉〕

嘉永六年五月、松陰先生は、伯父竹院上人を訪問した時、萩から黍粉の土産を持参している。これは、兄の竹院が黍粉を好きであることを知っている妹の滝が、畑で作った黍を粉にして松陰に持たせたものである。上人は萩から鎌倉まで土産として持つてきてくれたことに、食べるのが勿体ないとの感謝を述べたという。母滝の心遣いと温かい人柄、杉家の慈愛に満ちた家風をうかがい知ることができる。

〔松陰先生、先君の命日を忘れず〕

鎌倉滞在中、松陰先生は伯父竹院上人と恵純らの僧とともに、鎌倉大仏、袖ヶ浦、江ノ島を拝観した。その際、竹院上人は、遠来の甥のため魚料理を食べさせようと近江屋という茶屋に料理を頼んだところ、松陰先生は「先君（第十二代斎広）の忌日（二十九日が命日）である。」として箸をつけなかったという。これについて、竹院上人は「松陰は流浪中、先君の命日を忘れず、他日必ず祥あらん。」と述べたと言う。主君への忠義に熱い人柄をうかがい知ることができる。

〔大塔宮の土牢〕

瑞泉寺から徒歩で約十分。閑静な旧道を坂道を下ると鎌倉宮が見えてきた。当

時は大塔宮と呼ばれ、護良親王が、足利直義に幽閉された東光寺のあった所で、社殿の背後に親王が幽閉されたという土牢がある。大塔宮・護良親王は後醍醐天皇の第三皇子で、元弘の変が起きると、後醍醐天皇を援けて吉野、熊野等で鎌倉幕府討幕運動の中心として活躍。足利直義のもと、土牢に幽閉され、建武二年（二三三）北条高時の遺児・時行が鎌倉へ乱入の際に、足利直義により殺害される。その首は藪の中に捨てられたという。護良親王の墓は、大塔宮の近くの理智光寺跡の谷にあり、宮内庁が管理している。

〔荏柄天神社〕

鎌倉宮から徒歩数分の場所に、荏柄天神がある。石段を登ると銀杏の巨木が時代の経過を感じさせる。菅原道真を祀る神社で、鶴岡八幡宮の東方に位置する。鎌倉幕府との関わりがあり、武家政権の守護神として、鶴岡八幡宮とともに信仰された神社である。境内から南西約二〇〇mに、源頼朝が鎌倉に入り邸を構え幕府を開いたとされる大倉御所があり、谷を挟んで約三百m西側の丘陵には史跡法華堂跡（源頼朝墓・北条義時墓）がある。『吾妻鏡』には、建仁二年（一一二二）年九月十一日条で、鎌倉幕府第二代将軍・源頼家が大江広元を荏柄社祭の奉幣使として当社に派遣し、御祭神・菅原道真の御神忌三百年祭を執り行ったとある。

〔法華堂〕

法華堂跡（源頼朝墓・北条義時墓）として国の史跡に指定される。また義時法華堂遺構隣接地に毛利季光、大江広元、島津忠久、三浦泰村一族の供養墓がある。昨年NHK大河ドラマ「鎌倉の十三人」で放映された三浦一族終焉の地である。隣接する石段の上には、安永八年（一七七九）に薩摩藩主・島津重豪が島津氏初代・忠久墓を造営、このときに頼朝墓の整備も行っている。文政六年（一八二三）には萩藩主・毛利斉熙が毛利氏初代・季光墓と季光の父の大江広元墓を造営される。墓所はいずれも、やぐらとよばれる鎌倉地方に点在する横穴墓を転用したものである。

研修視察当日は、残念ながら、本年夏の大雨により倒壊した大木が石段を塞ぎ、立ち入り禁止の札が掲げられ、やむを得ず鳥居下からの参拝となった。

*大江広元（生年不明～一二二五）…

鎌倉幕府の政所初代別当を務めた人物。幕府の初代将軍源頼朝の側近として鎌倉幕府の創設に貢献。公家（朝廷の貴族）出身の広元は、鎌倉幕府と京都の公家との間の交渉で活躍し、頼朝の死後も、遺された正室北条政子や第二代執権北条義時とともに幕府の運営を支える。広元の墓のすぐ左隣の墓にまつられている毛利季光は、大江広元

の四男であり、代々長州藩主となる毛利氏の祖となる。この墓は、その縁から、文政六年（一八三三）に第十代長州藩主毛利斉熙が造営したもの。

*毛利季光（生年不明～一二四七）…鎌倉幕府の御家人で、幕府の創設に貢献した大江広元の四男、毛利氏の祖。朝廷と幕府が争った承久の乱（一二三二）で武功を挙げ、幕府の要職である評定衆に就くなど重用。しかし、北条氏と三浦氏が争った宝治合戦（一二四七）で妻の実家である三浦氏に味方し、戦に敗れた三浦氏一族とともに源頼朝の法華堂（日本式の木造の霊廟）で自害したと伝わる。季光の墓所は、大江広元の墓が造営されたのと同じ文政六年（一八二三）に、毛利斉熙により鶴岡八幡宮の西側（雪ノ下の鶯谷の地）に造営されたが、大正十年（一九二一）にこの地に移設される。

註

- ⑤『全集九巻』頁三六
 - ⑥『全集九巻』頁二七三・二七四
 - ⑦『全集九巻』頁三三〇
 - ⑧『全集七巻』頁三七七
 - ⑨『全集六巻』頁六八
 - ⑩『全集十巻』頁四一三
- 〔参考文献〕
 江戸の旅人吉田松陰 海原徹著
 「松陰の歩いた道」海原徹著

松陰研修塾東京・鎌倉特別研修

松陰先生の教えを心の支えに

西元 静香

数年前に松陰研修塾の講座に出席し、そのレベルの高さに私の不勉強と未熟さを痛感しました。

そののち奮起し、この会を受講して幾度も感激し、感動した経験があります。

萩市では松陰先生の魂を呼び覚ます会や松陰先生の足跡を辿る会があり、私も南は平戸・熊本へ、北は佐渡から矢立峠・小泊・三厩に立ち、松陰先生ゆかりの各地を巡りました。

六十歳より二十年間先人の遺業を人々に伝えるため、萩松陰神社のボランティアガイドもしました。

このたびの特別研修には、この足で確かめ、この眼を見開き、心に刻み込もうと誓って参加しました。

一日目の泉岳寺では、赤穂義士のそれぞれの墓石に「刃」の文字が刻まれてあり、線香を手向けて巡りました。

次の上野公園では、彰義隊墓所と西郷隆盛銅像とを見学しました。

夜の懇親会では自己紹介があり、皆さんが素晴らしい実績と見識の持ち主であることを驚きました。

二日目は回向院で、二・二六事件の磯部浅一（長門市油谷出身）夫妻の墓石を発見し、十思公園では処刑場跡と伝馬町牢屋敷跡の位置を知る事ができました。また、安政の大獄で勤王の志士九十六名が処刑された処を肅々と手を合わせ、十思公園を後にしました。

その後靖国神社を参拝し、続いて松陰

神社に参ると、丁度秋の維新まつりで若者が溢れ、「萩ものがたり」の本が販売されておき、ありがたく思いました。

最後はお台場の砲台跡を散策し、一日で一万歩近く歩きました。

三日目は、鎌倉の花の寺と呼ばれ親しまれている瑞泉寺にて抹茶の接待を受け、竹院和尚と松陰先生とにかかわる掛け軸を拝見しました。

瑞泉寺の作庭は七百年前、無窓国師によるもので、京都の天龍寺と苔寺の西芳寺などと同じ作者と知り、趣のある庭園を巡りました。また、萩の老人クラブが植樹された「深草の少将」と「萩小町」の椿の木にも会うことができ、大切に育てられていることに感謝しました。

大塔宮や荏柄神社、大江広元・島津忠久の墓所、法華堂跡を見学し、午後から鶴岡八幡宮を参拝し、慌ただしくも有意義な研修を無事終える事ができました。

この度の研修に際し膨大な資料を作成してくださいました関係役員の方々、また、当日お世話くださいました皆様から感謝申し上げます。

私はすでに八十歳を過ぎておりますが、松陰先生の教えを深く心の支えとして、より一層勉学に、行動にと精進できる日々でありたいと願っています。

祭られし赤穂義士の泉岳寺

礼す門前に背すじをただす

松陰研修塾東京・鎌倉特別研修

「知る感動・体験の感動」を学ぶ旅

西井 俊二

私は香川県高松市から参加させていただきました。もともと松陰先生のことには明治維新の立役者として尊敬はしていましたが、五年前に初めて松下村塾を訪れた時にとっても感銘を受けました。それ以来少しずつですが松陰先生の著書を読むことや、山口県を訪れては足跡を辿ることをしていました。しかしながら、周りに松陰先生を慕う仲間もおらず、翌年始まったコロナ禍もあり行き詰まりのようなものを感じていました。そこへネットで松陰研修塾基礎コースのことを知り、今回の特別研修に参加させていただくことができました。

今回の特別研修は文字通り私にとって「特別」なものになりました。

一つには今まで訪れたいと思っていた東京の松陰神社や靖国神社、小塚原向院、鎌倉の瑞泉寺などに参拝できたことです。特に松陰先生が埋葬されている松陰神社はお墓参りでもありますので念願がかなった思いでした。また瑞泉寺では、竹院和尚と松陰先生が語っている姿を想像したりして感慨深いものがありました。

二つ目は研修内容の素晴らしさです。初日に二か所、二日目に六か所、三日目に八ヶ所の合計十六か所近くを訪れ、量的なこともありましたがそれぞれに『研修のしおり』を用意してくださり、その中の詳細な資料を読みこれまで知らなかったことをたくさん勉強することができま



した。赤穂浪士と山鹿流兵学のことや鎌倉幕府と毛利家のつながりも恥ずかしながら今回初めて知りました。それ以外にも『研修のしおり』からたくさんの方のことを学んだのですが、素晴らしいのは研修中なので『研修のしおり』を読むことで得る「知る感動」とその場にいるという「体験の感動」の両方が同時に起こり、混ざり合っているといえないものの何度と感じました。こんなに量が多く、内容も濃く、特別な体験をできる研修は初めてです。

三つ目は一緒に研修を受けさせていただいた方たちです。どの方も松陰先生をお慕いする気持ちがいろいろなところに現れており、また少しでも新たなことを学ぼうとされている姿勢に頭が下がる思いでした。学び始めて五年目の私は素晴らしい先輩方に囲まれてとても幸せな時間でした。

最後にこの研修を準備してくださった理事長をはじめ理事の方々並びに一緒にさせていただいた先輩方に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございます。



第十四回 松陰研修塾基礎コース二年次

第二回講義内容のまとめ

松下村塾の初めての寄宿生 増野徳民

公益財団法人松風会 理事 友定 英章



増野 徳民

本郷歴史民俗資料館蔵

一 はじめに

「徳民」を詳しく紹介したのは、大正八年二月十七日本郷村に生まれた弘中道順氏である。

山口師範学校専攻科一組に在学中、郷土史に興味を持ち、昭和十七年十二月三十日付けで山口師範学校から発行された『山口県郷土研究第五号』に幼年期から晩年期までの徳民について書かれた『増野徳民と松陰先生』を発表している。

その後、同村の虎谷澄人氏が本郷村報に連載した書物を加筆追加し、平成六年十月一日に『本郷村の明治維新』と題して出版している。

共に徳民が松陰先生に師事した時代（前期勉学・後期実践運動参加）と國事に奔走した時代について「吉田松陰全集」を熟読し、まとめられた出版物である。

二 家系譜図から

四十一代 兼達、増野晋作、幼名隆治又徳民、後晋齊号周陰

天保十二年十一月二十一日二山口縣玖珂郡本郷村字今市二生ル、幼ニシテ漢学ヲ好ミ長州萩吉田松陰先生之門下生タルコト數年後醫業ヲ以テ終ル行年三十六年

明治三十七年時之内務大臣子爵品川彌次郎氏ト松陰門下ニテ實ニ水魚之友タリシト伝フ

壽命アリシナラバ勲功アラシニ可惜哉

法名 隆普陀院紹譽徳善兼達居士

三 松下村塾入塾『身内以外の塾生第一号』

徳民が暮らしていた山代地方の中

心地本郷は、本藩直轄の代官所（勘場）が置かれ、政治・経済・文化の拠点であった。そのため、本藩との行き来が多く、主要な道である山代街道を通じて多くの情報も、もたらされた。

その中に、「山代地方に代々にわたり、代官お抱えの勘定医がおり、その子が漢学を学び、優秀である。」という情報も含まれていた。また、勘定医である父寛道は本藩からの信頼が厚いことから、安政三年（一八五六）十月一日の山代代官日野良藏の政簡（嘉永七年（一八五四）二月十七日（安政三年（一八五六）十月八日））によって、松下村塾へ入塾が決まり、杉家に寄宿したと考えられる。

なお増野家は、山代三老の家系で、山代地方の円滑な統治を執り行う地元有力者でもあった。『嘉永元年（一八四八）九月帯刀を許可せられ司官也』家系譜で増野寛道の記載部分が物語る。

四 松下村塾入塾後の萩時代

入塾後は、松陰先生から彼に与えられた書「春秋左氏伝（三十三回）・日本外史（二十三回）」などの書物による講義を受けた。

安政三年十二月二十六日、松陰先生は徳民・榮太郎（吉田稔麿）への

講義の中で、「除夜讀後の作」を示している。

その中には漢詩が二十八編あり、二十三番目に『徳民醫師當醫國』がある。

『徳民醫師當醫國』

徳民は醫師、當に國を醫すべし。

『晋書に「上醫は國を醫し、中醫は民を醫し、下醫は病を醫す」とある。』

『上醫とは、國の乱れを正す人。』

※この漢詩の意識については、松風会前事務局長の水津英三氏からの助言をいただいた。

このことは、松陰先生が医師徳民に期待したこともあった。

特に身近で松陰先生の教えを受け、人一倍の努力家だった徳民は、他の塾生たちが大声で論議する最中も、ひとり行灯の芯を切り、読書が続けた。さらに皆が床に就いてからもまだ読書をするという猛勉強ぶりであった。

一年ほどで彼の論議は卓越したものとなり、松陰先生は、徳民に一目も二目も置くようになった。

そのころ松陰先生は、乾という名と無咎という字を贈っている。

徳民は毎朝松陰先生の髪を結い、衣服を整え、炊事掛としても活躍した。最も身近で松陰先生の教えを受

ける徳民を、他の塾生が嫉妬することさえあった。

松陰先生が野山獄へ再入獄後の徳民への思いは、安政六年（一八五九）

一月二十三日付けの書簡で、

「自分を師などと呼ぶな、君は郷里で奇男子、名医生として暮らせ」と記している。

また、安政六年（一八五九）一月二十七日付けの書簡では、

「無咎は更に二無（吉田栄太郎・松浦松洞）に及ばず、而れども一味の着実あり、又気魄あり、大節に臨みて、亦苟も生ざるなり」と

と書かれており、絶交を宣言した直後だけに説得力がある。

更に、安政六年（一八五九）五月二十二日付けの書簡では、

「増野無咎に留別す」という別れの詩を贈った。これに対して「徳民は送別の言葉」を松陰先生へ送っている。（東行送別詩歌集）

安政六年（一八五九）三月ごろに村塾を去った徳民は、医学の勉強に忙しかったためか、しばらく音沙汰がなかった。十月の終わりごろから藩医岡田以伯について医学を学んでいたようである。彼が再び現れるのは、安政七年（一八六〇）正月七日のことである。これは二と七の日を定日とした孟子会に参加するため

ある。主宰者の久坂玄瑞に誘われたらしく、同月三十日の先師築墳の相談会や二月七日の百日祭にも顔を見せている。

杉家では、万延元年（一八六〇）二月七日が松陰先生の死後百日目にあたるところから、「松陰百日祭」を営み、護国山団子岩の吉田家墓地に遺髪を埋葬することにした。

墓は二月十五日に完成し、松陰先生の遺言を守って、「松陰二十一回猛士墓」と彫られた。また、墓前には門下生達の名を刻んだ一對の石灯籠や花立て・水盤なども寄進された。水盤には、右から品川日孜（彌二郎）・増野乾（徳民）・松浦無窮（松洞）とあり。（中央に徳民の名が刻まれている。）

徳民は同年三月三日、再度山口から宮市方面へ向かうことにしたが、藩当局の取締りに遭い、そのまま足止めにされてしまった。もともと、首領格の久坂は「承り候得ば、徳民の事、音右衛門と申す臆病ものより、少々、怪敷思はれ、竟に宮市へ潜居候事もならず。佐々木小二郎宅へ呼寄せられ外出もならぬ次第に相成、可憐事に有之候。併し他同盟の事は少敷も露頭はせぬなり」と意外に呑気であった。

三月四日、故郷山代への送還が決

まった徳民に対し、久坂は秘かに松洞を通じて「彼一条十日計延引」を報せている。藩の役人に捕へられ、番人付きで強制送還された徳民は、父寛道の厳重な監視下に置かれた。身動きがとれないまま、上洛の機会を逸し、二度と久坂らと会うことはなかった。（なぜ徳民だけが捕らえられたか不明。）

五 芸州口の戦い

慶応二年（一八六六）六月に始まった芸州口の戦いでは、関戸の野戦病院へ参戦している。「攘夷以来諸所病院出張医官勤功録」には、山代宰判内の地下医二十名の中に診察兼調合方として山代宰判勘場医増野寛道、次に、調合方兼会計助役として寛道長男の増野普斎（徳民）の名前がある。明治二年（一八六九）六月、「寅年芸州口戦争之砲銃創人治療……」を賞され、金拾両を下賜されたのが、彼の得た唯一の報酬である。

六 故郷山代にて

文久二年（一八六二）三月五日以後は、厳格な父の教えを全うし、松陰先生からの教えである尊王攘夷の思想を心に閉じ込め、松陰を偲びて「去者日遠、在者益愚」と言ったことは、よくその心中を物語っている。

こうした思いを持ちつつ、一医師として本郷村民の治療に当たっていた。私はこの言葉を次のとおり解釈している。

「去者日遠」は、同門の亡くなった者は、月日がたつにつれて忘れられていく。転じて、親しかった者も遠く離れてしまうと、次第に親しみが薄くなる。

また、「在者益愚」は、山代にて恩師の思いを継承出来ず、ますます愚かな自分の姿がたまらなく、苦悶した余生である。

明治十年（一八七七）五月二十日病死。享年三十六歳。

七 おわりに

徳民など（三無生）は、「魅力」があるからこそ、松下村塾に入塾し、萩藩校明倫館の塾生達も同様な思いから私学の松下村塾に多数入塾したと考えられる。

なお、徳民は松陰先生の特に身近にいて信頼が厚く、松下村塾における、塾生の先駆けとして「縁の下」の力持的存在であり、「維新の礎石」を築いた功績者の一人でもあったと私は考えている。



第十四回松陰研修塾基礎コース二年次

第二回講義内容のまとめ

往復書簡による松陰と黙霖との論争

松朋会 阿武 博道

はじめに

幼い頃から皇室を敬う父の影響を受け、尊皇論者であった吉田松陰が、安政二年から三年にかけ勤王僧宇都宮黙霖との数度の手紙の交換を契機として、倒幕思想への思いを深めている。

ここで、往復書簡を手がかりに松陰の思想の変容をさぐってみることにしたい。

一 黙霖（二八四〜一八九七）について

黙霖の人物伝②

広島県呉市広町の人。浄土真宗僧侶。幼名采女、僧名は、鶴了又は鶴梁、号は黙霖・史狂・王民・梅溪・雪溪・雪卿。慶應二年還俗。姓は宇都宮、名は雄綱、字は絢夫、通称真名介という。

文政七年安芸長浜に生まる。私生児として母の手で育てられ、世間の艱難をなめつつ僧侶としての修行を続け、諸国を遍歴し十八才にして聲となり、二十二才の時本願寺の僧籍に入る。

十七才の時、皇室の衰微を嘆き、勤王の志を立て、天下の名儒志士を求めて

四十余国に三千余人を訪うと自らいう。嘉永四年頃より已に倒幕論を懐いていたが、容易に人に語らず、漢詩の巧みな奇僧として知られた。

二 黙霖と書簡での論争

黙霖との往復書簡

（安政三年八月十八日〜十九日）③

（松陰）

「僕上人の書を読む数十篇、具に上人の心を知る。上人、僕の書を読む数十篇、けだし亦具さに僕の心を知らん。然り而して一事の合わざるものあり」

（黙霖）

「僕此の書を両度よむ、其の中に泣きし所あり、微笑したる所あり。終わりに至りて泣くに涙も出ぬほど胸塞がれり。……人は人の志あるべし。吾れは我れなり。しかれども王室を奉ずるものは、其の心至誠より出づるなれば、同志といふこと概して知らるるなり。あまり不平なる故、又一書を贈る。」

（松陰）

「僕は毛利の臣なり、故に日夜毛利を奉

公することを錬磨するなり。毛利家は天子の臣なり、故に日夜天子に奉公するなり。吾れ等国主に忠勤するは即ち天子に忠勤するなり。然れども六百年來我が主の忠勤も天子へ尽くさざること多し。実に大罪をば自ら知れり。」

（黙霖）

「已上のことは我初めより知る」

（松陰）

◎「二誠、兆人を感じしむ」（諫幕論）

「ひとりの男の真心が億兆の人々を感動させる」

「吾れ天下の士と交はるを得る時は天下の士と謀り、先ず我が大夫を諭し、六百年の罪と今日忠勤の償とを知らせ、又我が主人をして是を知らしめ、又主人同列の人々をして悉く此の義を知らしめ、夫れより幕府をして前罪を悉く知らしめ、天子へ忠勤を遂げさるるなり。若し此の事が成らずして半途にて首を刎ねられたればそれ迄なり。」

若し僕幽囚の身にて死なば、吾れ必ず

一人の吾が志を継ぐの士をば後世に残し置くなり。子々孫々に至り候はばいつか時なきことは之れなく候。今朝の書に『一誠、兆人を感じしむ』というは此のことなり。」

（黙霖）

「僕も足下を惜しむこと甚し。…読みしとき毛髪まで立ちしなり。感じて泣くはここなり」

（松陰）

「我が主人、我が直諫を容れて六百年の大罪を知る時、我が主人より諸大名且つ征夷をも直諫するなり。…大將軍は総督の任にて二百年來の恩義一方ならず故に三諫も九諫も尽し尽すなり。」（諫幕論）

（黙霖）

「これは尤もなる事に候。我は將軍の祿を食まず、諸侯の臣に非ず、之を喜ぶのみ。」

（松陰）

「今の東夷たとい桀・紂にもあれ、我が主人も我が身も未だ天朝へ忠勤を欠きおりたれば、征夷の罪を挙ぐるに暇あらず。ただ己れの罪を顧みるのみ。」

上人極々不足なるは、上人の心は『一筆姦権を誅する』にあり。是れ孔子、春秋を作るの意なれば悪しとは申さず候らへども、今天下の危急累卵の勢申すに及ばず、中々筆を弄する所にてはなし。」

◎「一筆姦権を誅す」

「正義の一筆がよこしまな権力を責めて滅ぼす（倒幕論）」

（黙霖）

「しかりしかり。…僕一言すれば天下皆暢絶す。何ぞすすめられんや。一人守るところあり。しかれども大義興らば明日にても出でて、ことをなさん。」

（松陰）

「僕上人の独行特立を悲しむには非ず、人の善に遷り過を改むるを塞ぐ道理を悲

しむなり。人、善に遷らず過を改めずんば、一筆姦権を誅すと雖も姦権依然たり。…それでは誠に上人を以て僕は誠に頼み少なく存するなり。」

〔黙霖〕

「さにてはなし、僕胸中数千万言あり。しかれども天下において誰に心のままにこの志を話せんや。平生鬱々として樂しまざるなり。…ただ一言言ひたきことあり、書通にては行われず候。天、義を絶たざれば即ち他年互ひに胸中を照らさん。…」

○八月十九日

〔松陰〕

『一筆姦権を誅す』と『一誠、兆人を感じしむ』の界、今一応御出足までに御答へ下さるべく候。

〔黙霖〕

「一筆のことも一人にして千万人にこたえるなり。しかれども足下呑込みはすまい。…僕が用意は後に興る伯者（大名の旗頭）を醒まして天子を敬せしむる工夫なり。」

〔松陰〕

「此の論遂に合わざれば僕においては差支へなく候へども上人より必ず絶交すべし。」

〔黙霖〕

「われは絶せず。」（松陰が「私の考えと合わなければ絶交してください。」と言っているのに対して）

三 松陰の心情の変化

○〔松陰の附記〕

右黙霖は一向宗の僧なり。耳一向に聞えず、言舌不分りなれども、志は至って高し。漢文を以て数度の往復これあり候処、終に降参するなり。

四 松陰の倒幕論への変容

〔又読む七則〕（赤川淡水宛書簡）より④

…天朝を憂へ、因つて遂に夷狄を憤る者あり、夷狄を憤り因つて遂に天朝を憂ふる者あり。余幼にして家学を奉じ、兵法を講じ、夷狄は国患にして憤らざるべからざるを知れり。爾後あまねく夷狄の横なる所以を考へ、国家の衰えし所以を知り、ついに天朝の深憂、一朝一夕の故に非ざるを知れり。然れども其のいずれか本、いずれか末なるは未だ自ら信ずる能わざりき。

向に八月の間、一友に啓発せられて、巽然として始めて悟れり。従前天朝を憂へしは、夷狄に憤をなして見を起せり。本末既に錯れり。真に天朝を憂ふるに非ざりしなり。…

（心情的に倒幕論に変化）

五 松陰における尊皇攘夷論

松陰は安政三年（一八五六）八月、黙霖と尊皇・倒幕に関する論争をしたが、その結果、尊皇は目的であつて、手段と



編集後記

今年度は、昨年度から継続して第十四回松陰研修塾基礎コースの二次を開催しました。その中でも実際に現地に行き、目で見、肌で感じる「東京・鎌倉特別研修」を実施しました。

特別研修には、二十一名もの皆様にご参加をいただき、大きな成果を上げ、無事終了することができました。「東京・鎌倉特別研修」の実際につきましては、本会報の中に掲載していますので、ご覧ください。また、二年次第一回から第三回までの三回の研修会を開催しました。ご参加いただきました皆様には、厚くお礼申し上げます。

これらの成果を基に、令和六年度年度から始まる第十五回松陰研修塾基礎コースでは、講義に新しい内容を加えながら精査し、より充実した研修になるよう努めて参りたいと考えています。また、一年次に長門方面の实地研修を、二年次には長崎特別研修を行う予定にしています。

令和十二年は、松陰先生生誕二百年の年に当たります。まだ先のことのようにも思いますが、他の団体と連携しながら機運を高め、準備を進めていきたいと考えています。

註

①松陰全集七巻、全集定本五巻

②松陰全集十巻、頁六一〇

③松陰全集七巻頁四四二～四四七 定本五巻頁

四〇九～四一三

④安政三年・全集二巻頁四四二